

A年大斎節第3主日 ヨハネ4章5―26・39―42節

〔直訳〕

- 5 それで彼は来る シカルと言われるサマリヤの町へ
近くに ヤコブが彼の子ヨセフに与えたところの地方の。
6 さてあつた そこに ヤコブの泉が。
それでイエスは 旅のために疲れていて 座り込んだ ちようど 泉の前に。
時は ほぼ第六であつた。
- 7 来る サマリヤからの女が 汲むため 水を。
言う 彼女に イエスは、 「与えてください 私に 飲むことを」。
- 8 なぜなら彼の弟子たちは 出かけていた 町に 食物を彼らが買うようにと。
9 それで言う 彼に サマリヤの女は、 「どうして あなたはユダヤ人であるのに
私から 飲むことを 求めるか サマリヤの女である者（から）」。
なぜなら付き合わない ユダヤ人たちは サマリヤ人たちと。
10 答えて イエスは そして 言った 彼女に、 「もし知っていれば 神の賜物を
そして 誰で あるかを あなたに『与えてください 私に 飲むことを』と言う者が、
あなたは 求めたでしょう 彼に
そして彼は与えたでしょう あなたに 生きている水を」。
- 11 言う 彼に 「女は」、 「主よ、 バケツを あなたは持っていない
そして 井戸は ある 深く。 それでどこから あなたは持つか 生きている水を
12 あなたは より大きくないでしょうね 私たちの父ヤコブよりも、
その彼は 与えた 私たちに 井戸を そして 彼自身が それから 飲んだ
そして 彼の子たちが そして 彼の家畜が」。
- 13 答えて イエスは そして 言った 彼女に、
「すべての 飲む者は この水から 渴くだろう 再び。
14 誰でも 飲むなら 私が 彼に与えるだろうところの水から、
決して 渴かないだろう 永遠に、
むしろ 私が彼に与えるだろうところの水は
なるだろう 彼の中で 湧きあがる水の泉に 永遠の命へと」。
- 15 言う 彼に対して 女は、 「主よ、与えてください 私に その水を、
私が渴くことがないように また来ないように この場所に 汲むために」。
- 16 彼は言う 彼女に、「行って 呼びなさい あなたの夫を そして 来なさい この場所に」
17 答えて 女は そして 言った 彼に、「私は持っていない 夫を」。
18 言う 彼女に イエスは、「良く あなたは言った 次のことを 『夫を 私は持っていない』
そして 今 あなたが持っている者は ない あなたの夫で

このことは 本当のこと あなたが言った」。

19 言う 彼に 女は、 「主よ、私は観る 次のことを **預言者**で ある あなたは。

20 私たちの先祖は この山で 礼拝した。 そして あなたがたは 言う 次のことを エルサレムに ある 礼拝すべきところの場所は」。

21 言う 彼女に イエスは、 「信じよ 私を、女よ、次のことを 来る 時が そのとき その山でもエルサレムでもなく あなたがたは礼拝するだろう 父を。

22 あなたがたは 礼拝する あなたがたが知らないところのものを。

私たちは 礼拝する 私たちが知っているところのものを、 というのは 救いは ユダヤ人たちから ある。

23 しかし 来る 時が そして 今 ある、

そのとき まことの 礼拝者たちが 礼拝するだろう 父を 霊と真実において。 なぜならそして 父は そのような者たちを 探す 礼拝する人々を 彼を。

24 霊 神は、

そして 礼拝する人々は 彼を 霊と真実において 礼拝すべきである」。

25 言う 彼に 女は、

「私は知っている 次のことを **メシア**が 来る、 キリストと言われる方が。 とき 来る その方が、 彼は知らせるだろう 私たちに すべてを」。

26 言う 彼女に イエスは、 「私が である、 あなたに語る者が」。

39 だがその町から 多くの者が **信じた** 彼を サマリア人たちの

言葉のゆえに 次のことを証しする女の

「彼は言った 私に 私が行ったところのすべてのことを」。

40 それで来たとき 彼のもとへ サマリア人たちが、

彼らは求めていた 彼に 留まることを 彼らのそばに。

そして 彼は留まった そこに 二日間。

41 そして さらに より多くの者が **信じた** **彼の言葉のゆえに**、

42 また女に 彼らは話した 次のことを

「あなたの話のゆえに もはや私たちは**信じる**のではない、

なぜなら私たち自身が聞いた そして 私たちは知っている 次のことを

この方が ある まことに 世の救い主で。

〔新共同訳〕

5 それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。 6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。 正午ごろのことである。

7 サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。 8 弟子

たちは食べ物を買うために町に行っていた。9 すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであるう。」11 女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。12 あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」

13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」15 女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

16 イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、17 女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。18 あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」19 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。20 わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」21 イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。22 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」25 女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」26 イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

39 さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。40 そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのもとにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。41 そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。42 彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

①構成

「イエスとサマリアの女」の物語は次のような場面に分けることができる。

5―6節 物語の導入部

7―26節 第一の場面

27—38節	第二の場面
39—42節	物語の結び

① 第一段落（5—6節）

⑦ 4章4節は、イエスがユダヤからガリラヤへ行くために「サムリアを通らねばならなかった」と述べている。この叙述を受けて、物語の導入である第一段落では、イエスがサムリアのシカルという町に入り、ヤコブの井戸のそばに座ったという場面を描く。

② 第二段落—第一の場面（7—26節）

⑦ 7—26節が第一の場面を形成し、サムリアの女とイエスの間の会話を伝えているが、この場面はさらに三つに分けることができる。

7—15節 生きている水

16—18節 サマリヤの女の私生活

19—26節 真の礼拝

① 第二段落到繰り返される表現は「水」、「生きている水」、「飲む」、「与える」といった表現である。特に注目すべきことは、段落冒頭と結びの対応関係である。段落冒頭ではイエスがサムリアの女に「私に飲むことを与えてください」と求める。

② 自分の私生活を言い当てられた女は、イエスを預言者だと考え、礼拝の問題について真剣に問いかける。そこでこの段落では、「礼拝する」が繰り返される。イエスの到来とともに、場所とは結びつかない祭儀が「霊と真実において」ささげられる時が来ている。女がメシアの到来について語り出すと、イエスは「あなたと話しているわたしがそれだ」と宣言する。

③ 第三段落（39—42節）

⑦ 物語全体の結びとなるこの段落では、「信じる」が三度も繰り返されている。イエスを「信じた」者のもとにイエスが「留まる」と、「より多くの者が信じ」、彼らはイエスが「世の救い主」であると告白する。サムリアのひとりの女から始まった動きが、渇きからの癒しを求める多くの人々を巻き込んでいく。

④ サマリヤの町へ（5—6節）

① 4章3節にイエスは「ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた」とある。ユダヤからガリラヤに行くにはサムリアを通るのが一番の近道であるが、ユダヤ人たちはサムリアを避けて、ヨルダン渓谷を迂回していた。しかし4節は「サムリアを通らねばならなかった」と述べており、イエスがサムリアに入ることが、神の計画であったことが示されている。「ねばならなかった」と訳されている動詞は「デイ」であり、その行動を神が決めていることを表すときに用いられる。シカルはエバル山の南東麓の町で、ヤコブがヨセフに与えた土地の近くとされている。

② 直訳の「第六の時」は「正午」を表す。水を汲む通常の時刻は朝と夕方である。サムリアの女は誰も井戸にやって来ようとはしない時刻に出てきた。このような行動には、16—18節で言われるようなこの女の生活が反映しているのかもしれない。

③ヤコブの井戸にて——まことの礼拝をする時が来ている（7―26節）

① イエスは疲れて井戸のそばに座っていた。そこへサマリアの女が水を汲みに来る。イエスはサマリアの女に「私に飲むことを与えてください」と求める。イエスは「水を」とは言わずに、「飲むことを」と述べている。イエスは最初からのどの渇きを癒す水と「生きている水」とを区別しているからかもしれない。サマリアの女はその区別に気づかず、皮肉混じりにイエスに反問する。女は「ユダヤ人のあなたがなぜサマリア人の私に頼むのか」と意地の悪い応対をしている。当時、ユダヤ人はサマリア人のことを異邦の影響を受けた墮落した人たちだと蔑んでいた。女の受け答えにはそのような事情が隠されている。

② 紀元前926年頃にソロモンが死ぬと、イスラエル王国は南ユダと北イスラエルに分裂した。前722年にアッシリアが北イスラエルを征服すると（王下一七6）、サマリアはアッシリアの州都となり、属州名ともなった。アッシリアは属州サマリアに異民族を移住させた（王下一七24）。サマリアでは異民族との接触や混血が起こり、正統ユダヤ教徒はこれを侮蔑していた（エズ四1以下、シラ五〇26）。「サマリア派」の成立は紀元前3―2世紀と見られている。サマリア人はモーセ五書のみを経典とし、ゲリジム山で神殿祭儀を行い、ユダヤ人は聖書全体とエルサレム神殿を奉じる。このため、民族的・宗教的には同じ起源を持つにもかかわらず、両者は対立した。また紀元前128年には、ゲリジム山のサマリア人の神殿を、ハスモン家のヨハネ・ヒルカノス一世が占拠し破壊するという事件が起こり、ユダヤ人とサマリア人との対立は決定的になった。

③ 女がイエスをからかっているのは確かである。しかし、問いをイエスに投げ返すことによって、イエスに正面から向き合わされることになる。女の皮肉な態度に対するイエスの対応は意外である。ユダヤ人とサマリア人との確執などまったく無関係のように、「生きたいのちの水」について話す。イエスが井戸の水ではない「いのち」の水について語り始めると、理解は不完全であっても、女はその水に興味をもつて、15節では「私にその水を与えてください」と願い出る。この不思議な水の話にサマリアの女はいつのまにか引き込まれ、水を乞われた者が水を乞う者となる。

④ イエスを信じる者が受ける「永遠の命」に至る「生きている水」（10・11節）が、文字通りの「飲み水」と対比されている。「生きている水」という表現は、貯水槽などためられた水に対して、水源から湧き出て、常に新たになる水を表す。この言葉を聞いたサマリアの女が冷たくて美味しい湧き水しか思い浮かべられなくても当然であるが、イエスにとつては「永遠の命」に至る霊的な水を意味する。このように理解が食い違ったまま会話は進む。こうしたパターンはニコデモとの対話にも見られるが、このサマリアの女の場合は、最後には正しい理解に導かれる。旧約聖書での「生きている水」については、エレミヤ2章13節、ゼカリヤ14章8節、エゼキエル47章9節を参照。

⑤ イエスに自分の私生活を言い当てられたサマリアの女は、「この人は「預言者だろうか」と考え、ユダヤ人とサマリア人が争っていることの一つ、まことの礼拝はどちらの山で行われるべきかを尋ねる。サマリア人たちはエルサレムではなくゲリジム山で礼拝をささげていた。どちらが正しい礼拝の場所なのか争われていたが、イエスの答えはそのどちらでもない。イエスは「サマリアでもエルサレムでもない所で礼拝する時が来る。しかも今がそうだ」と言う。場所に限定されない礼拝は神の力である「霊」と神が与える「真理」によってささげられる。ヨハネ14章では「真理の霊」、すべてを教え、イエスの言葉を思い起こさせる聖霊について言及している。

① 女が「メシアが来られることは知っています」と言い、ようやくイエスの言葉がメシアの到来に関係があることに気がつく。しかし、それは完全なものではない。彼女は「その時」が「今来ている」というイエスの言葉を聞き逃しているからである。

② メシアの到来について語る女に、イエスは「それは、あなたと話をしているこのわたしだ」と明かす。サマリアの女が事態を正しく認識するためにはイエスによる啓示がなければならぬ。人間の側からの探求だけでは限界がある。サマリア人もユダヤ人も待望していたメシアが今彼女の目の前にいる。

④ 多くのサマリア人が信じる（39―42節）

③ 女はこのメシアの到来を一刻も早く、また一人でも多くの人々に知らせようとする。そして女からイエスのことを聞いた多くのサマリア人たちがイエスのところにやって来て、イエスを信じて、自分たちのところに宿をとるようになる。そこでイエスは二日間そこに滞在し、その間にさらに多くの人々がイエスの言葉を聞いて信じるようになる。彼らは女に「私たちはもうあなたが話してくれたからではなくて自分で聞いてこの方が救い主だとわかった」と言う。イエスはキリストであると宣べ伝えるこの女の役割は重要である。しかし、宣教する者の言葉はそれをさらに超え、人々が直接にイエス・キリストへと向かうようにと働きかける。イエスの言葉が宣教者を通して働いている。

⑤ イエスの言葉に出会う

④ 一人のサマリアの女が井戸でイエスに出会う。この出会いは彼女の人生だけでなく、彼女以外の人々の人生も大きく変えてしまう。その始まりは、「私に飲むことを与えてください」というイエスの呼びかけである。この呼びかけにサマリアの女は皮肉交じりの態度で応対する。ユダヤ人とサマリア人の確執が彼女を頑なにするが、それでも彼女はイエスの呼びかけに反応することによって、永遠の命をもたらす水、それを与えるメシアの到来を知る者へと変えられていく。イエスの言葉を最初から理解できることが必要なのではなく、反感であれ疑問であれ、イエスの言葉に向き合うことの大切さがこの物語には示されている。

⑤ サマリアの女はメシアの到来を知ったとき、それを証しした。イエスに出会い、キリストであると信じた人々は、その時からこの方が真実の世の救い主であることを宣教する役割を担うことになる。伝えられた人が伝える者にならっていく。このような宣教の働きの根本には、イエス・キリストを通して働く神の力がある。キリストに出会う者はキリストと共に、この神の働きに参与する者となっていく。

⑥ サマリアの女の証しを聞いてイエスを信じた人々は、彼女の話聞いたからではなく、自分自身でイエスの言葉を聞いて信じ、世の救い主を知った、と語る。42節に「信じる」と「知る」が用いられているが、ヨハネ福音書では「信じる」と「知る（分かる）」は深く結びついている（二二11―12、六69、一七8）。イエスを信じることはイエスが神から遣わされたという事実を承認することである。宣教者は自分の話を契機として、人々がイエスの言葉に出会う機会を作る。人がイエスを世の救い主と認めるためには、人の理解ではなく神の思いに触れることが必要だからである。